

金沢大学工学部 正員 喜内 敏

日本の近世における城郭構築の特徴の一つは石垣（石塁）の築造である。石垣を利用して城壁を築くことは古代よりすでに行なわれていたことと思われる。建武中興から室町時代に入り城郭は永久的な性質を帯びるようになり、織田信長以後鉄砲の伝来によって城郭の構築方法も一大変革を来し、城郭の上居の一部又は全面に石垣を積むことが盛んとなった。丘陵のかけ全部を石で築いたものを高石垣、土居の上に石垣を築いたものを鉢巻石垣、土居の下の方すなわち水際に石垣をまわしているものを腰巻石垣という。

上代には石作りとよぶ部曲工人があつて、石櫛（いしき）作りの作業を受け持っていたことは記紀などの古記録に見えている。上古から中世にかけて本格的な石工技術は貴族・豪族などの一部上層階級に属する専門工人の石作部（いしつくりべ）によって受けつがれ、隣邦民族の技術も学びこれを取り入れて発達してきた。したがって一般民間の石工作業はこのような専門工人の技術をまねる一方、自分自身の工夫と経験に頼るよりほかなかつた。

わが国の石積工事の職人については大きく二種に分けられる。すなわち地着きの石工職人と旅渡りの石工職人である。近世において石工を最も多く出したのは瀬戸内海の島々とその沿岸地方であり、その他各地の花崗岩の産地などがある。そしてこれらの地方より、旅渡りの石工職人となって日本の各地に働きに出た。

慶長年間の城普請における石工で有名なのは近江の国すなわち滋賀県の穴太（あなう）と馬淵であった。穴太は比叡山の琵琶湖側にある坂本の近くの小部落で壺笠山の麓にある。ここに古くから五輪塔の製作に巧みな石工が多くいて石塔師とよばれていた。安土城の建設に際し織田信長に招かれ、以後石垣師に転業することになった。その後諸国の城普請に利用され、穴太といえば石垣築の別名となり、穴太役という職名までできた。穴太は穴生・安能・阿野あるいは穴納と書くときがある。馬淵は国鉄近江八幡駅の附近にある比叡山の麓の村で長福寺と岩倉の西部落が有名である。元来、この村は石臼作りをしていたのであるが安土城建設に際し信長に招かれてより後、各地の築城工事に参加している。馬淵の石工は楼閣の根太石・地覆石の据えつけを主とし、穴太の石工はおもに石垣築を受け持った。

金沢城は一向一揆の時代、その策源地としてここに本願寺の支坊が建設された。その創建の年代は延徳年中（1489～92）とも推定されていたが、最近は天文15年（1546）の創建ということに諸説が一致している。古くはこのことを御山と称していたが天正8年（1580）佐久間盛政が御山を攻め落してここを居城とし、御山を尾山と改めた。その後佐久間盛政は天正11年柴田勝家にくみし豊臣秀吉軍に敗れ、前田利家の入城となった。はじめは尾山と金沢とを混用していたようであるが三代藩主利常の慶長ころには金沢という呼称に落ちついたらしい。佐久間盛政の在城期間は3年という短期間であり、その当時の城郭の構造などほとんど不明である。初代加賀藩主前田利家の天正期から三代利常の慶長期までの間に金沢城の基本構造が成立した。

金沢城に関する石工として、元和-寛永初年に戸波清兵衛・杉野久左衛門・後藤全兵衛の名が見える。戸波と杉野は江川坂本穴太の出身であり、後藤は大阪夏の陣で戦死した後藤又兵衛基次の子である。後藤又兵衛は幡川三木城主別所長治の家老後藤基国の子であった。戸波清兵衛の病死後、せがみ駿河はなにか不調法があつて跡目を仰せ付けられなかった。寛永後には杉野津右衛門・穴生源介・藤田三右衛門がおり、杉野・穴生は坂本穴太村の出身で藤田は後に江戸に帰った。その後の石工に小川長右衛門・杉野茂兵衛・穴生又助・矢倉多兵衛・杉野伝右衛門・後藤勘左衛門・林市左衛門などがいた。また別の文献には、前田利家の越前府中にいた時、穴生源助・小川長右衛門がいたのを初めとする、とのべているものがある。これらの石工のうち、後藤全兵衛基和を初代として十代目の後藤卓美氏が金沢市に現在居住されている。そして後藤家に相伝の多くの秘籍文献が金沢市立図書館に寄贈され、後藤文庫として收藏されている。なお、穴生源介正寿より12代目の穴太友三郎氏も金沢市に現在居住されており、穴太家の由緒書・金沢城内に設置した木造通管の絵図・小松城の絵図・その他と所蔵されている。金沢の旧町名に穴町という所があつた。藩初めのころ、穴生方の人達がここに住んでいたので穴生町の名が起つたが後に誤つて穴町になったものという。

城郭の石積の方法について、最近の城郭や石垣に関する二、三の書物と除けば、今日古文献として見ることでできるのは軍学書中の築城関係の項及びその解説書、なうびに秘伝書として伝わつていゝ「唯子一人伝」とか「家内独見書」の類である。金沢城の高石垣に関する文献で今日残っているものは穴太家及び後藤家の古文書である。穴太家のものは明治の半ば頃まで相対多くの古文書が保存されていたらしいが、その後散逸し、現在技術的な説明のあるものはあまり残っていない。

金沢市立図書館に所蔵されている後藤文書の内、石積の技術に関するものと次にあげる。()内は冊数又は巻数を示す。唯子一人伝(5)、唯子一人伝(1)、古伝書(1)、城石垣始秘伝抄(1)石垣積方秘伝書(1)、高石垣縄張1巻(1)、新積地形准縄極秘抄(2)、新に石垣築縄張極意之事(1)、門台石垣規合等秘伝書(1)、その他の技術関係書物24冊、絵図類として、崩石垣縄張深秘図、湖水縁に石垣築様秘図、規合矩方絵図、新に石垣築様縄張規合矩方秘法絵図、半鶴半合之積方図、矩方左右を知る絵図、など合計7種があり、なお工事と始めるときの鉄初式の記述及び絵図など今日他に見られぬものが多くある。なおこの他に金沢城や小松城関係の記録・絵図や寛書など多数あり興味深い。これらの石積に関する書物や絵図を見ると石積に関する苦心は勿論のこと、これらの基礎に重大な関心を持って入念に施工したことがうかがわれる。

後藤文書によれば後藤家の人々は金沢城の石垣の築造補修工事の他に、小松城の築造、江戸城天主台の修補(明暦3年)、加賀・越中の所々の橋台・川除工事、江州大津・海津旅屋石垣の築造に關係した記録がある。穴太家の由緒書によれば、金沢城の外に、大坂城、淀城、奥州会津城、江戸城、越中高岡城、小松城などの番請に加わり、なお加賀・越中の所々の橋台を築いている。慶長14年名古屋城の番請の際、前田利常(利光)も仰せつかり、これに参加したか他の藩より工事がおくれ、帰国がおくれたことが記録にのつていゝ。寛永9年(1632)にサイフォン原理を用いて金沢城内に水を導いた板屋兵四郎の事は有名であるが、この兵四郎が金沢城の石垣を積んだことが菩提寺の過去帳に記入されている。